

現代社会と自由の問題

野村 博
(佛敎大学社会学敎授)

一九四五年八月十五日、天皇の「終戦の詔勅」とともに、「大東亜戦争」は日本の無条件降服で終結した。

徴兵年齢繰り上げで現役入隊をした京都師団から朝鮮平壤の歩兵通信部隊に転属させられていた私は、同年八月二十三日の朝、占領のために南下してきたソ連軍によって捕えられ、平壤郊外の三合里に集結のうえ、興南港からナホトカ経由でシベリアへ連行された。それ以来、二冬三年の間、しばしば酷寒零下三十度を下回る日々を含めて、スチャン地区において山での伐採作業を主とした強制労働に従事させられたのである。戦時捕虜としてラーゲル（収容所）に抑留されている三年間、文字どおり一粒の米も食することなく、ただ支給される極めて少

量の「黒パン」を——それも一日三食分が一度に与えられるために、三食分を毎日一度で片づけてしまっても満腹感の得られない私どもは、今では理解も想像もできないことであるが、犬の排泄した糞や煉瓦の破片をさえ、その色が似ているところから、黒パンと見誤って手に取るほどの飢餓に苦しみ悩まされ通しで、まさに、この世の餓鬼道というにふさわしい生き地獄を生きただであつた。

空腹のうえの重労働、——そのために「一所懸命」という言葉がどういうことを意味するかを否応なしに体験させられた私どもは、その前夜隣りに寝た戦友が朝には動かぬ身になっていた多くの痛ましい姿を目にしなが

らも、どういふわけか幸いに生命が長らえて、再び故国の土を踏むことができた。

思えば、舞鶴湾で、もどかしく思う私どもを乗せたまま一夜停泊した「復員船」が、心身ともに疲労困憊しながらも躍る心の私どもを平棧橋まで運んでくれた時、「岸壁の母」たちが目を輝かしながら見守るなか、その棧橋を重く、て、軽い（つまり、ふらふらした）足取りで渡ったことが、つい昨日のことのように髣髴させられる。

夢にまで何度となく見たわが家に帰って、歓迎に駆け付けてくれた友人たちと、ささやかな夕食の宴でおたがいに今生で再会できたことを祝った後、畳の部屋の柔らかな蒲団の感触を味わいながら夢か現かとまどろんだその翌朝、身体の異状を感じて医師の来診を仰いだところ、栄養失調とのこと。早速、入院加療を受けることになった。軍務服役で休学中の大学に対して復学届けを出したものの、復員直後の一年間は、大学での聴講と病院生活とがこもごもといった有様であった。

そんななかで、ある日、今は亡き久松真一教授が宗教学の講義で、「諸君のまえで生死の問題を講ずること

は、私にとって極めて辛く困難で……」と述べられたのを鮮烈な印象として覚えている。それというのも、おそらくは、大なり小なり死線を越えて大学に戻った学生が、やせた身体に復員服姿のままで、目だけぎよろぎよろさせながら、先生の講義を食い入るように聴いていたからではなかったかと思う。今日からすれば、想像すらできない絵図であろう。

さて、あの頃から三十有余年の歳月が速くも経ってしまった。「戦中」はもちろん、「戦後」という言葉さえ、もはや時代がかって、言わば身につまされる響きを全く失ってしまったかのである。戦後社会は、現代社会へと移行した——もちろん、かずかずの戦争後遺症もちながらではあるが。ところで、私はここで、いわゆる時代区分について詮索や詮議をしようと思っているのではない。また、言うまでもないが、精励で勤勉な日本人が、敗戦のどん底から立ち上がって、ひたすら日本の復興に努力した結果、今日の「現代社会」を築きあげた——その手腕と業績を素直に高く評価するのに決して吝

かでもない。

しかし、それにもかかわらず、現代の日本には大きな歪み、目に余る矛盾、苛立たしい葛藤が厳として存在することは、大方の見るところ、否定できない事実である。言わば戦争体験の風化とともに「戦後」も忘却の彼方に追いやられ、巷には「自由」が氾濫している。私が歪み・矛盾・葛藤と称するのも、実はこの「自由」を念頭にしてのことである。自由ほど人々を魅了するものはないのだろう。しかしまた、自由ほど人々を当惑させるものも、ほかに余りないのではなからうか。日本人口の過半数を占めるにいたった戦後世代はもとより、戦中・戦前と言われる老・壮年も、ひとしく自由を享有している。しかも、その自由にまつわる歪み・矛盾・葛藤に——意識的にも無意識的にも——悩みながら、である。

いったい、自由とは何なのであろうか。

もともと事実について記述する語であった「自由」が、いつの間にか一人歩きをして、価値語として情動的な意味あいをもつようになり、現代社会では民主主義の崇高な理念をさえ表わす言葉になってしまった。実は、

ここに自由にまつわる大きな問題が胚胎するのである。いささか堅苦しいけれども、ここで「自由」という言葉について考えてみよう。

例えば「私は自由である」と言う時、それは必ず「何かから自由」であるということの意味している。この場合、その「何か」が拘束・束縛・強制・干渉など、人の思想と行動を妨げる障害になるような消極的・否定的なものであることは明らかであろう。したがって、この消極的・否定的な「何か」がないことを「私は自由である」という陳述で表明しているのであるから、その「何か」が明確でなければ、「自由」の意味する内実は全く不分明であると言わなければならない。

つまり端的に言えば、自由とは何らかの障害の欠如を意味するが、その障害の種類や内容が不明確な場合には、自由という概念は曖昧で多義的なものになってしまうのである。だから自由は、障害との関係において初めて明確な意味をもつことができる相対的な概念にはかならない。

しかし、それにもかかわらず、「自由」は、現実には、

概念のこの相対性が——故意にか無意識的にか——無視されて、抽象的に曖昧で多義的なままに、例えば「自由のために！」とか「自由を獲得するために！」とか、あるいは「自由な世界を実現するために！」とかいうようなスローガンとして、全く相反するイデオロギーの政党間を初め、個人の日常的な社会生活の諸相においても、情動的に、さらには闘争的にさえ、しばしば使用されているのである。

このように具象性を欠いて使用される自由という言葉は、しかし、人々にどれほど情動的・闘争的な響きを与えようとも、「何かからの自由」のその「何か」が明示されない限り、有意味ではありえない。人々を魅了する自由という言葉が、同時に人々を困惑させるのも、ここに一つの原因があると思われるのである。

ところが、従来、自由という概念には積極的な意味があつて、それが真の自由であるという主張も行なわれてきた。つまり、「何かからの自由」ではなくて、「何かをする自由」「何かへの自由」こそ、真の自由であるという主張である。そして、例えば、自我の自発的

な実現とか、精神の創造的な営為や活動などが、積極的な意味での自由であると考えられてきたのである。

なるほど、「何かをする自由」「何かへの自由」は、「何かからの自由」とは異なるようにも見えるが、しかし、「何かをする自由」は、その「何か」をするために障害になるかも知れないような拘束・束縛・強制・干渉などが無いということを必要とするから、したがって、「何かからの自由」を必然的に含意していると言わなければならぬだろう。もちろん、「何かをする自由」の「何か」と、「何かからの自由」の「何か」とは、価値の観点からみて、前者が積極的・肯定的なものであり、後者が消極的・否定的なものであるという相違は当然存在するのであるが。

換言すれば、「何かをする自由」は、「何かをするために何かから自由」であることを含意するから、帰するところ、「何かをする自由」(積極的自由)は「何かからの自由」(消極的自由)に還元できると考えられるのである。しかし、ここで極めて重要なことは、その逆に、「何かからの自由」は、必ずしも「何かをする自

由」を含意してはいないという点である。例えば、「学問をする自由」は、確かに学問をするために障害になるかも知れない国家権力による干渉の欠如（つまり消極的自由）を必要とするけれど、しかしその逆に、国家権力による干渉の欠如は、必ずしも学問をする自由（つまり積極的自由）を含意しているとは限らないのである。

ここに、言わば自由の陥穽（かき落とし穴）があつて、人々が自由を賛美しながらも恣意を慨嘆するという、自由のパラドクスカルにして人々を当惑させる今一つの原因があると考えられるのである。

さて、一見して込み入つたように思われる議論を行なつてきたが、しかし、以上の考察から初めてわかるように、「消極的自由」の相対性というものが無視され、

「何かからの自由」のその「何か」が明確化されず、さらにまた、積極的自由と称される自由の積極性が蹂躪（じゅうりゃん）される時、いったい「自由」という言葉によって何が意味されることになるのであろうか。積極・消極いずれにせよ、自由はその概念が明確化されることなしに謳歌（おうか）される時、——その時に出現するのは、アナキー（乱世）か

権力主義社会か、そのいずれかであらう。これが現代社会における自由の根本問題であると考えられるのである。

私はさきほど、現代社会における自由の氾濫や自由にまつわる歪み・矛盾・葛藤について言及した。しかし、私は決して、現代社会に自由が多過ぎるなどと言っているのではない。それどころか、むしろ、高度産業主義社会の官僚制化に伴い、戦前・戦中に見られたのと同様な人間性の無視や没却が著しく押し進められ、ますます人間の物格化が社会生活のあらゆる面で認められるようになった現実に対して、腹立たしい思いに駆り立てられているのである。

しかし、それにもかかわらず——否、それだからこそ、と言ふべきかも知れないが——「何かからの自由」の「何か」の明確化されない自由が巷に氾濫している一方で、「何かをする自由」の「何か」を志向しない傾向が顕著に見られる現代社会に、何か大きな歪み・目に余る矛盾・苛立たしい葛藤を感じないわけにはいかないの

である。

自由の氾濫を防ぐためには、「何かからの自由」の「何か」を明確化することによって、逆説的に聞こえるかも知れないが、ますます多くの自由を獲得するために戦うことが必要であろうし、自由にまつわる歪み・矛盾・葛藤を是正するためには、「何かをする自由」の「何か」への志向性を人々がすべて積極的にもつようになることが要請されるであろう。

何はともあれ、「自由」という情動的な意味あいを持った価値語に酔い痴れることは禁物である——わが国が再び、あの悪夢のごとき戦前・戦中の軍国主義的な全体主義国家に落ち入るのを防ぐためにも、そしてまた、私どもが平和の安逸をむさぼり、無為徒食、生き甲斐のない人生を送らないようにするためにも。

——一九八一年二月十一日脱稿——

「佛教福祉」第六号 目次

青少年の自殺と宗教教育
医療社会学の課題
児童精神衛生の諸問題と健全化への視座
現代児童福祉と仏教寺院
近代保育事業史における仏教の役割

林 谷 靈 法
筆 谷 稔
中 村 永 司
中 垣 昌 美
菊 池 正 治

児童福祉の課題と仏教
人生における意味の探究
本多鉄磨とその作品について
宗教的情操教育の問題

施設養護問題の側面から
養護施設の社会化とアフターケア

仏教と児童福祉
仏教と児童福祉

現代仏教と仏教説法
現代仏教と児童福祉

仏教と児童福祉
仏教と児童福祉

仏教保育考
補足給付の受給資格と支給排除規定

北東アジア社会事業教育者セミナーに参加して
それから

大正時代を中心とした宗門児童福祉管見
良寛と子供

大正大学児研部の創立と其後の思い出
仏教保育の現状と未来

名古屋を中心とする仏教福祉の回顧
秋思

仏教と児童福祉
手の教育心臓の教育

一人一人の児童福祉を見直そう
子育てと児童の権利

麦の穂なんか泣くものか

▽「佛教福祉」第五号・第六号残部少しありますからご希望の方は至急お申込み下さい。
実費頒価 一、〇〇〇円 送料二五〇円

山崎昭三 山崎陽三 宮崎良和 高橋学 花岡大 須賀賢道 山縣文治 綿野得定 江上秀雄 鈴木木宗憲 中野真澄 渡辺真澄 花田順信 久保田 上田千秋 田村信弘 山田巖雄 内山俊憲 鵜飼隆成 家田隆現 宇佐美詠練 高麗義光 矢野俊雄 添田翔 早坂乃 山本恭枝 伊藤藤壽子